レッシングと赤司繁太郎

ヴォルフガング・シャモニ

1.

復活祭という特別な日に、この場所で赤司繁太郎とドイツの作家レッシングについてお話しすることになりましたが、大変ありがたくまた恐縮に思っております。と同時にまた不安にも思っています。私は日本文学を専攻にしているもので、レッシングの専門家でもなく、赤司繁太郎の業績を充分知るものでもないものですので、どうもふさわしくない人だと感じています。また、私はカトリックとして育てられたのですが、その後は教会と離れてしまい、カトリックでもなく、プロテスタントでもなく、信仰のうすい人間であって、皆様の今日の礼拝を汚すおそれがあるのではと思い、赤司さんのご招待に応じるべきかどうか、と迷ったのです。ただ、今日ここでお話しすることによって、何十年もお会いしていない赤司さんと再会でき、また自分が尊敬しているレッシングについての話は、もしかしたら、すこしだけ皆様のためになるかもしれないと思い、ついに赤司さんの親切なご招待に応じました。

もう皆様はよくご存知だと思いますが、赤司繁太郎は明治25年3月に「烈真具」という小さな本を発表したのです。赤司繁太郎はその時、数え年２１歳、満１９歳の青年でした。わずか９０ページの本ですが、大変よく問題を整理していて、特にレッシングの宗教意見を体系的に紹介するものとして、日本ではそのあとも長くこの本に匹適する研究が出なかったのです。十九歳の青年の本としてだけではなく、誰が書いた本としても、驚くべき本です。

どうしてあの時点で赤司繁太郎とレッシングがめぐりあったのでしょうか。それも皆さんがご存知と思いますが、ドイツの宣教師シュピンネルが１８８５年つまり明治１８年、日本に来て、ドイツ系の新しい自由神学の思想を日本にもたらしたのです。シュピンネル牧師はそういう新しい思想をもってきただけではなく、彼は人としても魅力的な人物であったらしく、多くないが、いろいろな人をその教会にひきつける力があったようです。永井荷風のお母さんもお祖母さんもその教会の信者になったことはよく知られています。そして若き赤司繁太郎も明治２４年シュピンネルによって洗礼をうけました。シュピンネルは教会とそれに附属する神学学校とは別に定期的に「ソール・オリエンス」つまり「東の太陽」とか「東からの光」

という小さな会合を催していましたが、その会合ではレッシングの話もしたのです。レッシングはシュピンネルなどが日本にもたらした自由神学の先駆者であったからです。その会合に赤司繁太郎も、またあとで哲学の分野で有名になる大西祝も参加したわけです。

でも、きょうは、そういう歴史的な経緯には深く入らないで、むしろ、何故、レッシングがシュピンネルなどの宣教師によって紹介されたのか、そしてレッシングのどこが、赤司繁太郎にとって、それほど魅力的だったのかということを、出来るだけ、赤司繁太郎のことばを引用しながら、お話したいと思います。

2.

ゴットホルト・エフライム・レッシングは1729年に東部ドイツのザクセン王国の東のはずれのカーメンツという小さな町に生まれました。お父さんは牧師で、母方のお祖父さんも牧師でした。ドイツの古典文学の作家は牧師の家に生まれた人が不思議に多いのです。お父さんはただの牧師であっただけではなく、神学関係また信仰関係の著作がかなり多くて、特に目立つのは英語からの翻訳がいくつもあることです。当時は学問のことばとしてのラテン語やバイブルのことばとしてのギリシャ語とヘブライ語が牧師の必須の教養であったのですが、その上、世俗的な教養としてのフランス語がつくこともありました。しかし英語ができる、しかもあの田舎で英語の神学の著作を翻訳するというのは、大変めずらしいことでした。お父さんの神学的な立場は勿論、ルーテル正統派の神学でした。そういう家庭でそだったレッシングは自然、神学を勉強して、牧師になるように期待されました。そして、そのとおりに高等学校を普通より一年早く卒業した後、１７歳でライプチヒ大学の神学科に入学したのです。しかし、一度家をはなれると、興味が違う方向に発展して、演劇に熱中するようになりました。当時、社会的に軽蔑されていた役者の間にまじわって、自分も戯曲、しかも特に喜劇を書くようになったのです。でも、彼のその後の演劇作者としての活動はここで省略しましょう。ここではレッシングがドイツの近代演劇の最初の重要な作者であるということを申し上げるにとどめます。

ただ、覚えておいていただきたいことは、彼が牧師の家で育ったこと、高等学校でも大いにルーテル派の神学の教えを受けたこと、そして大学でも始めは神学を勉強したということです。後には、興味がいろいろな方面にひろがったのですが、

彼は一生の間神学関係の本を読んで、同時代のキリスト教内の議論に注意を払い続けたのです。

レッシングは大学で一時神学から医学に移りますが、医学も早く止めて、その後、職業作家として生きようと奮闘しながら、いろいろな職業を転々としました。しかし今日の話にとって重要なことは、彼が二十年ぐらい転々とまわった挙句、1769年に北ドイツの田舎、ヴォルフェンブッテルにある古い図書館の館長に任命されたということです。レッシングは演劇作家として活躍するかたわら、学者でもあって、歴史、美術、思想、古典ラテン語文学、さては神学の分野について沢山の著作を発表しました。それで、学者として図書館館長になれたのは不思議ではなかったのです。ヴォルフェンブッテルの図書館は今でも、ドイツ有数の図書館です。

3.

1769年というと、西ヨーロッパでは啓蒙主義の時代です。フランスの作家であり哲学者であったヴォルテールは1759年にその辛辣な風刺小説『カンディード』を、1764年には、その有名な『哲学辞典』を発表しました（ヴォルテールは一時プロシア王によってベルリンに招聘されたのですが、丁度そのとき、同じベルリンに居た若きレッシングが、ヴォルテールのため翻訳のアルバイトをしたこともありました）。当時はヴォルテールなどの啓蒙思想は、実は嵐のようにキリスト教のあらゆる宗派をふきあらしたのです。今まで確かだと思っていた教条が、突然不確かになりました。実は、もう以前から、自然科学と歴史学の進歩で、宇宙が五千年前に作られたということが信じられなくなり、また、地球は宇宙の真ん中に位置していないとわかれば、バイブルに出る宇宙観・地理観は維持しにくくなっていたのです。そして十八世紀の後半になると、バイブルのテキストも歴史的文献として読まれ、いや、文学として読まれるようになったのです。そして、バイブルをこまかく読めば、決して矛盾のないテキストだとは言えなくなりました。その上、啓蒙主義者は人間の理性の自立性を主張して、あらゆる分野が、そして宗教自体も理性の厳しい批判にさらされるようになりました。理性をもって探求できない分野はこの人間の世界にあってはならないという主張でした。そして、理性の名において、無限の進歩が約束され、将来、すべての謎、すべての不可解なことが解明されるだろうとさえ、考えられるようになったのです（今もそう思う人が多いようです）。そういう思想にとって、神の「啓示」はありえない、バイブルに述べられている奇跡などは

ただの迷信に過ぎないということになったのです。バイブル全体は、せいぜい、人類の子供時代の歴史的文献だということになってしまったのです。フランスのヴォルテールは、神の存在を否定しなかったのですが（当時、まっすぐ無神論にはしる哲学者もいたのですが）、ヴォルテールなどが信じる神は非情に抽象的な存在で、人間から遠く離れ、自然や歴史の動きには係わりのない神でした。その立場は、今は デイズム、つまり「理神論」、赤司繁太郎の用語ですと「超絶神教派」といわれます。広辞苑の「デイズム」の項目をみますと、イギリスのトーランド、フランスのヴォルテール、ドイツのレッシングがその例としてあげらていますが、実はレッシングはちょっと違う立場をとっていたというべきです。それではレッシングの立場はどんな立場なのか、と言いますと、回答はむずかしいですが、これからそれについて述べたいと思います。

赤司繁太郎はレッシングの宗教意見を述べる長い章のはじめにレッシングのつぎのことばを引用しています。「人の価値は真理を有するに非ずして真理を求めんとして費やしたる労力の上に在り」（43 頁）。これはあるいは、レッシングの基本的な態度であったといえます。この引用の全体を、今、女房と二人で試みた訳で補って見ます。

> 「自分が所有している、あるいは所有していると思っている真理によってではなく、真理に迫ろうと真摯にはらった努力によって、人間の価値が決められる。というのは、真理の所有を通してではなく、真理の探求を通して、人間はその力を拡充し、そしてそこにこそ人間的完成へのたえざる進歩が存在するのである。所有は人間を安心させ、怠惰にし、そして自惚れさせる。
>
> もし、神が、右手に「すべての真理」を、左手に「真理を求めてやまない欲求」を、それも「求めながら永久に迷う」という条件つきで、持っていて、私に向かい「選べ」というならば、私は謙虚にその左手にすがり、「こちらを与えたまえ。真理そのものはただ御身のみのものであるゆえ。」と答えるであろう。」

少し長い引用でしたが、レッシングの思想が、バイブルの文面を絶対的真理だと思い、したがって自分が真理を「所有している」と思っているルーテル正当派の人々と、どれほど違っていたか、又、理性による無限なる進歩に確信をもった俗流の啓蒙主義者とも、どれほど違っていたかが、お分かりかと思います。

4.

レッシングはヴォルフェンブッテルの図書館長になったとき、その図書館の蔵書についての研究雑誌を発行するようになりました。しかも、地元のブラウンシュワイグの殿様から、その雑誌は検閲なしとし、何でも発表できる、という特権を与えられました。それで彼は1774年にその雑誌に奇妙な原稿を発表したのです。それは、ハンブルクのヘルマン・ザムエル・ライマルスという学者の原稿でした。ライマルスが1768年になくなったあとで、その子供たちによってレッシングに委託された原稿でした。あぶない原稿でしたので、レッシングがこれを、著者が誰か分からない原稿として、図書館で発見したかのようにみせかけて、「無名氏」の原稿として雑誌に発表したのです。何故あぶないかといいますと、かなりラジカルにデイズム（理神論）の立場を述べ、また聖書の中に見える矛盾をあげつらったものだったからです。今読むと、非常にペダンティックな合理主義的なものですが、当時の正統なルーテル派から見れば、キリスト教そのものに対する真正面からの攻撃としか読めないものでした。レッシングはその後、四年に亘って断続的にこの原稿を「無名氏の断片」と称して部分的に発表しました。もともとの原稿は、「神様を理性的に礼拝する人たちを弁護する書」という題で、全体が始めて印刷になったのは、何と二世紀あとの1971年です。ところで、これを発表すると、あらゆる方面から猛烈な批判が浴びせられたのですが、レッシングは原著の著者が誰であるかについては明かさないで、沈黙をまもったのです。レッシングは決してライマルスの立場に賛成ではなかったので、原稿を発表する度にそれにいちいち自分の反論をつけたのですが、レッシング自身をも危険思想の持ち主であると中傷する批判も発表されました。レッシングは、当時、議論は公開でなすべきだという立場をつらぬいたのですが、それは、明らかに国家権力と結び付いた当時のルーテル派の神学に対する挑戦でした。この「無名氏の断片」についての議論には、さまざまな人が参加していますが、レッシングもいろいろな形で実名または匿名で反論して、当時のキリスト教神学がかかえていたさまざまな問題を自分なりに整理していきました。

一つの問題は聖書が神の「啓示」であれば、一体どういう意味で啓示であるのかということでした。ルーテル正統派にとっては、聖書は一語一語神のことばであったのですが、それは、当時の歴史学、文献学、自然科学などの成果をみれば、どうしても維持できない立場であったのです。しかし、一語一語が真理でなければ、

聖書の真理は一体どこにあるのかということでした。もう一つの問題はこの人類にいろいろな宗教があって、みな、自分の宗教が真理である、他はすべて間違っていると信じている現状をどう理解すべきかということでした。この二つの問題は、おそらく今でも多くのキリスト教徒をなやましている問題ではないかと思います。そういう問題についてレッシングがこの大論争の中で、いろいろな形で回答をこころみたのですが、これといった、最終的な回答はしていないのです。それも、彼なりの真理の探求でした。ここで、彼の回答の三つを紹介することにします。

5.

一つは1777年、つまり例の論争が頂点に達したときに、発表された小さなパンフレットで、題は「ヨハネの遺言」とか「ヨハネの遺訓」と翻訳できるものです。小さな問答体の文章で、話す人はただ「彼」と「私」とだけあるのですが、それは明らかに、「私」はレッシング自身、「彼」は例の論争で論敵であった神学者を指しているようです。問答体ですが、大変軽妙な文章で、口語的ですこし分かりにくいところもあります。中心をなしているのは、本来のイエスの教えとその後のキリスト教は違うのではないかという疑問です。

そして、何がイエスの中心的な教えであるかということを説明するには、聖書の文章ではなく、教父ヒエロニムスが伝えるヨハネ（ヨハネ伝福音書を書いたヨハネ）についての一つの小さな話を引用しています。その話によれば、ヨハネが年取って、エペソにいたときに、礼拝にあつまった人々が、どうか、ためになる話をしてくださいとたのんだのです。それで、ヨハネがもう年取って、長い話はできないので、ただ一言、「わが子たちよ、いつくしみあいなさい」（赤司繁太郎はそれを明治時代的なことばで「小子等よ、互いに相愛せよ」と訳しています）といったそうです。聞く人は皆、この簡潔で、心に訴える文句に感心したそうです。それで、その後、またヨハネにお話をお願いすると、又同じことをいったそうです。そしてその後も、何回も同じ一句を言っただけでした。それで、聞く人が不満になって、「師よ、一体どうしていつも同じことを言うのですか」と尋ねるのです。それに対してヨハネが「主が命じたもうたからです。それだけ、ただそれだけを実行しさえすれば充分、不足なく充分なのですから。」と返事をしたということです。

問答の中の「彼」はその単純さにあきれて、ひやかしたりしているのですが、結局は、この単純な教えに対して、自分の浅薄性をさらけ出してしまいます。さて、

ヨハネの遺訓でのべられた思想は、そのままレッシングの信仰だと思う人もいますが、レッシングは、やはり信仰と理性の関係がどうあるべきかについて、一生、探求をつづけたのです。そして自分の信仰の一番深いよりどころは何かと、なかなか公表しませんでした。他面、彼がいろいろな著作のなかで、いわゆる敬虔派とその単純な信仰にたいして共感と尊敬をしめしているので、あるいは、このヨハネの遺訓が彼の信仰の核心に近いかもしれません。とにかく、キリスト教の核心は聖書のいろいろな歴史的な話ではなく、ましてや教会があとからつくった教条体系ではないというのが、レッシングの長年の主張であったのはたしかです。

6.

さて、当時のもう一つの問題は、宗教の違い、宗教の多様性ということでした。キリスト教だけが真理で、他はすべてまちがっていると思えば、問題はないのですが、十八世紀には世界の知識が急速にふえましたので、他の宗教も崇高な思想をふくんでいるし、他の宗教の信者、特に、ドイツの中にもいるユダヤ人の間、又それほど遠くない外国にいる回教徒の間にも、深い信仰をもっている人、また道徳的にすぐれた人物がいることを発見するわけです。それをどう理解すべきか、となやむ人が出て来ました。そういう疑問に答えるように、レッシングが「人類の教育」という小さな本を発表しました。この本は１００条からなる、わずか８９ページのものですが、人類の歴史をすべて、神による人類の教育とみなす雄大な構想を展開しています。その教育の過程で、聖書は神があたえてくれた一つの教科書だといっています。つまり旧約聖書の、原始的な、いわば肉体的な教えから、新約聖書の精神的な教えへの過程を分析しています。この本の最初の 54 条はすでに 1777 年、例の「無名氏の断片」へのコメントの中で、雑誌に発表したのですが、100 条からなる全体は 1780 年に、つまりレッシングが亡くなる一年前に小冊子として発表されました。表紙にレッシングの名前はただの編集者としてあげられているだけです。

この「人類の教育」のはじまりのところを赤司繁太郎がつぎのように翻訳しています。

「教育は一箇人に発る黙示［註：今でいう「啓示」］なり。然れども神の黙示は全人類に発りたる、又尚発り居る教育なり。教育はその人の天性有せざる所の物を与ふる為めに非ずして、その人自らが有するものを早く且つ容易に発達

せしむる為めなり。神の黙示も亦斯の如し。夫の教育は教師及び父よりなれども、黙示は直接に神よりなり。」（赤司繁太郎の訳、58 頁、句読点や濁り点は引用者が施した。以下同じ。）

これは最初の４条を少し省略して翻訳したものです。

この「人類の教育」によれば、ユダヤ教が古くて原始的な宗教、キリスト教は進んだ宗教になりますが、それはかならずしも、レッシングの本音ではないと思われます。ひとつの思想的な実験です。本文にはやたらと、「もしかしたら」とか「かもしれない」という表現が使われています。キリスト教を歴史的な進化過程で、ユダヤ教より上位においていますが、将来、キリスト教のあとに「永遠の福音」が来るとも言っています。そして最後に、仏教を思わせるような輪廻転生の思想を一つの可能性として述べています。この本の序文は、この本のねらいを説明して、その実験性を強調しています。そして次のことばで結んでいます。

「ある宗教について嘲ったりおこったりするよりも、すべての宗教は人間の理性がそれぞれの土地で発展できた、また将来にも発展しつづけるべき形にすぎないとみなしたらいかがでしょうか。神によってつくられたこのよき世には、何も軽蔑すべきものがないと思われているのに、ただただ、人の宗教が軽蔑に値するのでしょうか。神がすべてのことに関与していると信じられるのに、ただただ、われわれの迷いに関与していないと信じられるでしょうか。」

7.

さて、三番目のレッシングの回答を紹介しましょう。1778 年、例の「ヨハネの遺訓」を発表した次の年ですが、例の論争が頂点に達して、レッシングの雇い主であったブラウンシュヴァイクの殿様がついに、レッシングから、検閲を通さないでよいという特権を取り上げてしまいます。それでレッシングは一時匿名で「外国」つまりハンブルクなどで発表してみたのですが、結局、直接宗教を論じることをあきらめたのです。しかし、それで、自分の思想を演劇という形で表現しようと思いつきました。彼の言葉をかりれば、「私の古い説教台にもどろう」と決心したのです。つぎの年、1779 年に、その結果として生まれたのが、有名な「賢人ナータン」という戯曲でした。この「賢人ナータン」は、宗教の多様性、実際の宗教と真理の問題をさらにちがう立場から考える実験でした。この戯曲は複雑な、面白い筋をもっていて、大変うつくしいドイツ語で書かれており、ドイツ文学史の上でも、大きな転

換期を画した作品ですが、ここでは、ただ、その中核をなしている一つの説話をご紹介するだけにします。この戯曲は十二世紀終わり頃のエルサレムを舞台にして、三つの宗教、つまりキリスト教、ユダヤ教、そして回教の信者が登場します。中心人物はユダヤ人のナータンで、それに丁度キリスト教徒の十字軍をエルサレムから追い払った回教のサルタンのサラディン、そして捕虜としてエルサレムにとどめられている十字軍のある騎士、敬虔なキリスト教の修道士、また、大司教などが登場します。その演劇が展開する過程で、サルタンのサラディンが、ナータンを窮地に立たせようと思って、この三つの宗教のどれが正しいと思うかと、聞いて来ます。ナータンはどんな返事しても、まずい立場に立たされるわけですが、結局一つの説話で返事をします。それは次のような話です。

東の方のある国に、貴重な指輪を持っている家がありました。その家では代々、父が自分の一番愛している息子にその指輪を残すしきたりがありましたが、その指輪をもらった人は家の家長になるだけではなく、その指輪の不思議な力で神にも人にも愛されるのです。さて、ある代に至って、その父に三人の息子がいて、しかも、三人とも父に同じように愛されており、父はどうしても、彼らのうちの一人だけに指輪をやって、他の二人を差別する気にはなれませんでした。それで、ひそかに金属細工人にそっくりの指輪をあと二つ作らせて、生前、三人の息子に一人一人指輪を一つ与えておきます。さて、お父さんが亡くなると、三人の息子がそれぞれ家長の位を主張して、あらそいになります。そしてついに裁判所に行って、判決をもとめます。その裁判官は息子たちの話を聞いて、いろいろ考えた挙句、こういう判決を下すのです。

「汝らが譲り受けしものを皆、真なりと思へ。察するに父の意は唯一の指輪を遺して子孫の中に争をなさしめ、唯一人にして他を専制圧抑せしめんとするが如きことあるを忌み嫌ひて、同じく三人に一つ宛を分かち与へたるならん。兎に角父が汝ら三人を愛すること均しくして一人を殊に偏寵せしが如き事なかりしは明白なり。然らば汝等各々父の意を受け継ぎ、父の清廉公平なる愛を守り互いに愛の競争をなし、且つ指輪の徳を顕はし、又は温順、耐忍、仁愛を以て或は又神に従順なることを以てその徳を助くべきなり。斯くの如くせば、決して争なからん。然れども若し一万年の永き後に至りて復もや後裔の中にその徳につき争起らば、その時に至り再び来りて裁判を仰ぐも決して遅からざるべし。

その時に至らば、予の如き愚なるものならずして他の賢こき人来りて此の裁判の席を占め、以て是非曲直の判断を下さん。」（赤司繁太郎の訳、74－75 頁）

これは、ナータンがサラジンに対してなした話の結びです。

ここにはあきらかに「人類の教育」と又違う思想が展開されています。「人類の教育」では、ユダヤ教とキリスト教が歴史的発展の道すじの上で、「より古い」と「より進んだ宗教」として序列が付けられたのですが、ここで、ユダヤ教、キリスト教、回教が同じ水準にならべられています。お互いを軽蔑せず、お互いを説伏することなく、愛の競争をして、未来に向かっていく姿が描き出されています。人間が一人一人、自分がたまたまもっている宗教の中で、「愛の競争をなし」、人間らしく生きよ、と解釈できます。これは又、初めに引用したレッシングの有名な命題と通じるものです。何が最終的な真理であるかは、人間に分らないことです。真理への真摯なる努力それ自体が、たとえ、たえず迷っても、人間の人間らしさをなしていると考えられています。「賢人ナータン」では、真理の探究がそれぞれの信仰をもった人間の実践にあらわれるのです。この実践を「愛」といっているのは、また「ヨハネの遺訓」の「わが子たちよ、いつくしみあいなさい」ということばに通じるのです。レッシングのこのような真摯な探求の精神、また神学的な空論をすてた実践の精神が、明治の日本で、若き赤司繁太郎をレッシングにひきつけたのではないかと思われます。

レッシングの探求では、実際に存在する宗教が理性のきびしい批判の対象になりながら、同時に信仰が歴史的な知識と社会的な習慣から解放されて、純粋な信仰になっています。私はレッシングが決してただの理性万能主義者ではない、もっと深いところがあるということを今日の話をもって説明したかったのですが、ことばがつたなくて、言いたいことが充分言えませんでした。しかし、これからレッシングの「賢人ナータン」などの翻訳や、また赤司繁太郎の「烈眞具」を読んでみたい、と思われる方がいらっしゃれば、うれしいです。

ありがとうございました。

ヴォルフガング･シャモニ

後記

赤司繁太郎の「烈眞具」の実物はほとんど入手不可能ですが、さいわい国会図書館のホームページを通してアクセス出来る近代デジタルライブラリーで、その全ページがデジタル化されていて、自由に読むことが出来ます。

「賢人ナータン」は岩波文庫創刊の際、1927 年に一斉に刊行された二十二冊の一冊に選ばれて（その版が 2006 年に復刊されています）、戦後もまた別な翻訳で岩波文庫に入っていますが、現在はむしろ白水社の、浜川祥枝訳「賢人ナータン」を含む「レッシング名作集」の方が入手しやすいでしょう。
レッシングの宗教観については 1998 年に安酸敏眞氏の詳細を極めた本「レッシングとドイツの啓蒙」（「人類の教育」の新訳を含む）が創文社より刊行されました。
なお、筆者は秋沢美枝子との共訳で「ヨハネの遺訓」をみすず書房の雑誌「みすず」（335 号、1990 年十月）に発表しています。

以上

2018 年の後記
以上は 2009 年 4 月 12 日（復活祭）に世田谷区北沢 5－14－10 にある日本自由キリスト教会の集いでした話で、後に日本自由キリスト教会の「教会報」259 号（同年八月）と 260 号（九月）に連載されたものです。今、二三の誤植を訂正し、いくつかの助詞を変えただけで、このホームページで公開します。
話の初めに出る「赤司さん」は赤司繁雄（あかし・しげお）さんで、当時その教会の牧師をつとめていました。赤司繁雄さんは赤司繁太郎（あかし・しげたろう）の息子で 1925 年に生まれ、2009 年 10 月 24 日になくなりました。85 歳でした。赤司繁雄は謙遜でおだやかな方で、あの小さな教会の精神的中心でした。自分の父について 1995 年に『自由基督教の運動－赤司繁太郎の生涯とその周辺』（朝日書林）という本を発表しました。赤司繁太郎についてもっと細かく知りたい人にその本を薦めます。